

「シラカバと蝶 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



ガやチョウは、翅を閉じた状態で見えるのは「翅の裏側」、開いた状態（静止姿勢）で見えるのが「翅の表」である。この「虫」は最初、翅を完全に閉じていたので、翅の裏側しか見えず、一見ガのようにも見えた。しかし慎重に近づいて観察すると、触覚は「棍棒状」でチョウに間違いはない。眼状紋はないので「ジャノメチョウ」の仲間ではない。チョウはガよりずっと種類が少ないが、それでも私のような素人には同定（種名の決定）は非常に難しい。上の写真は、シラカバの樹液を、吻（ふん）で吸っているところだ。



このチョウは林内を盛んに飛び回り、いろいろな切り株で休んでいた。飛ぶ時の翅の表側の色はオレンジ色で、この切り株に止まった時に、やっと翅を広げてくれた。翅の表裏の色の差が大きい。翅の表の模様からして、どうやら「タテハチョウ」の仲間のようだ。



しばらくして、完全に静止姿勢で動かなくなったので、至近距離で撮影できた。私はチョウの知識に乏しいので、図鑑を開き、最初は「ヒオドシチョウ」と同定した。しかし心配だったので、チョウに詳しい方に画像を送って聞いたところ「キタテハ（秋型）」という回答だった。その後、タテハチョウ科の見分け方について調べた結果、キタテハでもないとわかった。



決め手は、翅裏の小さな白紋である。これで「**エルタテハ**」*Nymphalis vaualbum* というチョウだとわかった。小白紋が「L」の字に見えるのでこの名がある。キタテハもエルタテハも、夏に成虫になった「秋型」は成虫の状態越冬する。このあたりは真冬には氷点下 20℃近くまで下がるのに、どうやって耐えていたのか不思議だ。脚が片側 2 本しか見えないのは、もう 1 本は通常折りたたんでいて、使っていない為である。

成虫は樹液や果実の汁を好み、幼虫はシラカバやダケカンバの葉を餌とする。このあたりの高原の環境は、まさにエルタテハの生息に適している。キタテハよりもずっと珍しく、地域によっては絶滅の恐れもあるという。春先に珍しいチョウに出会えてよかった。